

最優秀賞作品

「KANO～1931 海の向こうの甲子園～」感想文

志村貴洋

20代 会社員 神奈川県

今から2年前に台湾を訪れたさい、台湾の友人から映画を観に行こうと誘われた。聞くところによると、台湾で作られた映画だという。中国語が解せないうえに上映時間はなんと3時間。自分がはたして理解できるのか。そんな一抹の不安を抱えながらも劇場に向かったが、私は最後までその映画を理解し、感動することができた。日本語の吹き替えや字幕が一切なかったにもかかわらずである。そう、セリフのほとんどが日本語。舞台は統治時代の台湾である。

『KANO』—この映画では嘉義農林学校という実在した野球部が甲子園に初出場、そして準優勝を成し遂げるまでのストーリーが描かれている。『KANO』は2014年2月の公開から約半年で3.2億元（約11億円）の興行収入を記録している。私たちが劇場を訪れた際も、たしかにその盛況ぶりを肌で感じる事ができた。日本では考えられないことだが、一つの映画館で30分毎に上映しないと供給が間に合わないのである。その映画を観ようと人々は長い行列を作り、並んでいるうちに直近の上映回が満員御礼となる。私たちが劇場に入ることができたのは、その日の最終回だった。台湾で野球は国技の一つであるため、野球に対する関心度の高さは感じていた。が、これほどまでの熱狂ぶりは全く予想だにできなかった。しかも日本人ですらあまり知らない、戦前の甲子園の話である。なぜこれほどまでに、特に若者の胸を熱くしたのだろうか。

明治時代にアメリカから伝わった野球。だがそれは日本人にとって単なるスポーツではなく、精神修養としての要素が強い。たとえば、選手達は試合前に本塁上で整列し、一礼する。この一連の立居振舞は剣道や柔道と相通ずるものがある。高校野球などで当然のようにみられる光景は、外国へ行くと一切見られない。日米の中学生による野球交流を特集したテレビ番組で、参加した米国人のインタビューは印象に残っている。

「日本の中学生は礼儀正しい。キャッチボールやノックのさい、帽子を脱ぐことで指導する監督や選手に対して感謝の意を示しているとは知らなかった。」

日本における野球は、武士道精神を根底に発展した。そして台湾にも「ベースボ

ール」ではなく、「野球」が伝わったのだ。

映画の冒頭では、荒れ果てたグラウンド、使い古された道具で練習する嘉農野球部は、お世辞にもチームとは呼べる状態ではなかった。事実、初代監督を務めた安藤信哉氏は数学の教員で、野球は全くの門外漢。野球部の初陣「第 6 回全島中等学校野球大会（台湾の全国大会）」では台中商業と対戦し、13 対 0 と惨憺たる結果で終えた。しかし、両チームのスターティングメンバーを比較してみると、嘉農は日本人が 4 人、漢民族が 2 人、高砂族が 3 人で構成されていた一方で、台中商業は台湾人の選手が一人もいなかった。当時の新聞は嘉農ナインをこのように記している。

「真山卯一君をはじめバッテリーの上松、東の両君都合三人の高砂族に一塁手と左翼手の本島人も交って民族の融和をプレーの上に現はしてゐる然しまだチームという程のものではなく単に捕れて打てるという野球の初歩を染めたに過ぎないチームであった。」（1928 年 7 月 15 日『台湾日日新報』）

台中商業戦での惨敗を受け、嘉農の樋口孝校長は近藤兵太郎という一人の日本人を招き入れることを決意した。近藤は愛媛県松山市出身。高校は松山商業の前身、愛媛県立商業学校に進学し、野球部に入部する。当時の松山商業は名門第一高等学校の杉浦忠雄氏によって、全国にその名を轟かせていた。近藤も杉浦の手ほどきを受けた一人で、在学時は主将として、卒業後は松山商業の初代監督として野球部を牽引した。その妙々たる指導力により、1925 年の第 2 回全国選抜中等学校野球大会で優勝をもぎ取った。しかし 3 年後の四国大会で優勝を逃してしまい、その責任を背負って監督を辞任する。

近藤が体得した野球理論は、発展途上の嘉農で如何なく発揮された。現代野球ではもはや常識のスカウト活動も、近藤は積極的に実施した。高砂族はスピード、漢民族はパワーに優れているとすでに見抜いていたのだ。そして他の部活動からも、野球の特性を有する生徒がいれば野球部に勧誘した。テニス部員だった蘇正生も、類い稀なパワーに惚れた近藤によって野球部へ転部した。その能力を証明するかのように、蘇は甲子園ではアジア人初のフェンスダイレクトを記録した。

才能溢れる部員を集めた近藤は、科学的練習とメンタルトレーニングを徹底した。近藤は「野球はパーセンテージのスポーツ」が持論で、ルールや戦術の確認、練習は日没までみっちり行った。ある夜は、宿舎を真っ暗にして蝋燭を 1 本だけ灯らせ、それを皆で囲んで精神統一を行う。試合は常に平常心で臨むことを、近藤は部員たちの身体に刻ませた。

近藤の指導には学生時代の教え、つまり武士道精神が念頭にあった。部員に対して常に厳しく接していたが、部の予算が不足すると方々に頭を下げて支援を求めた。そして近藤が民族関係なく平等に接する姿に、異なる民族の部員たちは一つにまとまったのである。

嘉農野球部を奮い立たせた理由がもう一つある。それが台湾における野球格差だ。前述の通り、台湾で初の野球部が組織されたのは台北である。それ以降、台湾北部を中心に野球が普及した。全ての設備が整ったグラウンド、当時としては高価な野球道具を一式揃えるのは並大抵ではなかった。

映画では、近藤が嘉義農林高校に着任した2年後の「文化三百年記念全島中等学校野球大会」の様子が描かれている。近藤による特訓もあり、嘉農野球部は嘉義地区の大会で優勝するほどの実力をつけていた。この大会でも順調に勝ち進むのであったが、決勝で敗れてしまい念願の甲子園出場は叶わなかった。上級生が最後の大会に敗れ甲子園への夢を下級生に託すシーンは、甲子園を目指す球児そのものだった。

その翌年に行われた「第9回全島中等学校野球大会」。この初戦で台湾人の呉明捷がノーヒットノーランを達成し、決勝戦も勢いのそのまま、延長戦を制した。近藤が着任してからわずか3年余りで嘉農は念願の優勝旗を手にするのであった。

これまでの代表校は台北の学校が独占してきたが、どれも日本人を主体にしたチームであった。野球先進国の日本人が主体であれば野球に対する経験・理解は台湾と比べ一日の長がある。それに対して「三族協和」が旗印の近藤率いる嘉農ナインは、台湾野球に一石を投じる存在となった。「多少荒削り」と近藤が評したように、大会中の失策数は多かったものの、本土の強豪校を倒すダークホース的存在になることを、嘉農は優勝をもって示したのであった。

嘉農の甲子園出場という一報に、本土の甲子園ファンも驚いた。大会審判団や体協野球部の幹事、そして台湾日日新報と大阪朝日新聞の記者らが集い、いかに嘉農が甲子園で勝ち抜くかを語るという異例の野球座談会も、ラジオを通じて日本国民に伝えられている。台湾代表の過去最高成績は1929年に台北一中が記録したベスト4。嘉農はこれ以上、つまり決勝進出が一つの目標だったが、当時の野球専門誌『野球界』では甲子園の優勝候補に嘉農の名はなかった。これまでの台湾代表と比較すれば、「三族混成チーム」は本土のレベルには達していないと分析したのである。

嘉農ナインの初戦は神奈川代表の神奈川商工。この試合で嘉農のエース、呉明捷は9回完封という好成績を収めた。まさかの結果に観客は驚き、瞬く間に下馬評は覆されるのであった。先述の『野球界』でも、「種族のカクテル」、「人気が又100パーセント、学生らしい動作に大いに好感がもてる」と手のひらを返して大々的に嘉農を持ち上げ

た。その勢いはとどまるどころを知らず、準決勝では甲子園の常連校、小倉工業を 10 対 2 で下した。ここまできると台湾では優勝への期待がすこぶる高まり、日本本土においても嘉農ナインの活躍が全国区となっていた。この知らせは当時日本が統治していた満州や朝鮮にも届き、租界地であった上海では嘉農を招待する計画まで立てられたのである。

そして決勝の中京商業戦、映画のクライマックスでもある。これまで快投を見せてきた呉であったが、連投からくる疲れは隠せなかった。呉の武器は足を高い位置から上げ下ろすという、大胆なフォームから投げられる剛速球のため、体力の消耗は普通の投球フォームに比すれば大きい。さらに利き手の指から出血し、コントロールもままならない。近藤も呉の様子がおかしいことに気づき、出血を見て投手の交代を勧めた。しかし呉はそれでも投げ抜くことを志願し、チームメイトもその気迫に応えようと果敢に守り抜いた。試合は 0 対 4 で敗れたものの、呉は満身創痕ながらも全試合を完投したのである。

惜しくも準優勝に終わった嘉農であったが、その猛々しい戦いぶり、規律を重んじるチーム精神は多くの日本人の心に焼きついた。それが後に「天下の嘉農」と呼ばれる所以となる。芥川賞・直木賞の生みの親である小説家・菊池寛は嘉農の戦いぶりをこう述懐した。

「僕は嘉義農林が神奈川商工と戦った時から嘉義ひいきになった。内地人、本島人、高砂族といふ変わった人種が同じ目的のため協力し努力してをるといふ事が何となく涙ぐましい感じを起こさせる。実際に甲子園に来て見るとファンの大部分が嘉義ひいきだ。優勝旗が中京に授与されると同じ位の拍手が嘉義に賞品が授与される時に起こったのでもわかる。ラジオで聞いてみるとどんなドウモウな連中かとおもふと決してさうでない、皆好個の青年である」(1931年8月22日『東京朝日新聞』)

近藤が短期間ながらも嘉農ナインに叩き込んだ技術・精神力は、甲子園という大舞台で見事発揮された。それはつまり、「精神野球」、「平等主義」、「実力主義」の体現である。この「嘉農精神」は嘉義農林学校が国立嘉義大学と改称されてからも脈々と受け継がれている。2000年に嘉農高が嘉義大学として改組された際には陳水扁総統出席の下、準優勝記念碑の除幕式が執り行われた。また創立90周年にあたる2009年には、記念碑の隣に日本語で「天下の嘉農」と書かれた碑が建てられた。

台湾における統治政策は、欧米のそれと比較すれば違いが際立つ。欧米によるアジア・アフリカ地域の植民地政策では、原住民は人にあらず、完全に奴隷扱いであった。

はたして日本のように、同じ土俵で戦う機会があっただろうか。八田與一による嘉南大圳設計や磯永吉・末永仁らが開発した蓬莱米といった功績が、現代の日本人にも知られている。日本が統治政策においても八紘一宇の精神で臨んだ結果だろう。しかし嘉農の戦いぶりについても、それらに勝るとも劣らないエピソードではないだろうか。映画に誘ってくれた台湾の友人に感謝するとともに、なぜ日本でこのような事実が語り継がれていかないのか、残念に思うのであった。

なぜ台湾では日本統治時代の歴史を、こうも純粹に、日本以上に振り返ることができるのか。同じ時代に統治していた朝鮮とは対照的である。韓国では統治の象徴であった朝鮮総督府は「屈辱の象徴」として破壊され、日本が心血注いで築いた資産は強奪した。当時の史実は捻じ曲げられ、自分たちばかりに都合が良い「妄想」として拡散している。『KANO』の制作・脚本、また『海角七号 君想う、国境の南』の監督を務めた魏徳聖は、日本の統治時代を取り上げる理由をこう述べている。

「台湾のアイデンティティーを考える際に日本との関係は避けて通れない。」(2014年4月6日『日本経済新聞』)

台湾映画のなかには抗日運動を描いたものがあるが、それは紛れもない事実であり、台湾のアイデンティティを論じるなかで不可避な史実なのだ。韓国のように国威発揚のためではない。事実を基にその国の存在意義を論じる、これが正しい国民の姿である。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。」

歴史は「省みる」ことばかりが是とは限らない。「顧みる」ことも必要だ。これまで日本は「顧みる」ことから忌避し続けた。しかし、国民の多くが悟り始めた。メディアだけが過去の呪縛から遁逃できずにいると。

台湾の学校が甲子園初出場にして準優勝。日本の近現代史には、私たち日本人が知らない史実が存在すること、そして「過去との向き合い方」をこの映画を通じて痛感した。日本国内において、一人でも多くの人がこの映画に触れることができれば自虐史観脱却の第一歩を踏み出すことになるはずだ。終わりの始まりはもうそこまで来ている。

文献目録

林 勝 龍 (2012) 「日本統治下台湾における武士道野球の受容と展開」